『裸の大地第二部　犬橇事始』（角幡唯介著）

シリーズ第一作の前著『裸の大地第一部　狩と漂泊』が出版されてから１年半、“これぞ冒険の新境地”と前宣伝の大きかった後続の第二作『裸の大地第二部　犬橇事始』が１年ほど前に出版された時に市立図書館に貸し出し予約を掛けてみたら、なんと予約順位が既に 18 番目となっていて、これでは１年待っても順番が廻って来ないので極細年金の貧乏財布を叩いて買ってみた。

シリウス・ジャーナル第 74 号（2023 年 3 月）で前著を紹介した折にも、著者の近年の探検物は一見する限りでは羊頭狗肉、針小棒大、どうでもよいことを屁理屈を捏ね廻して如何にもそれらしく語る内容ばかりと批判めいたことも書いたが（よく読んでみれば彼のこのような文章の行間には貴重な探検哲学が隠されていたのだが・・）、今回も、前半の部分の犬橇旅行や橇犬の調達訓練の模様や橇犬との付き合い、現地グリーンランド極北での生活や現地住民との付き合いなど、この探検本のバックグラウンドを描いた前半の部分ではいくら読み進んでも犬橇論のウンチクばかりで、期待した腰巻キャッチコピーの“新冒険”考は全く現れず、大海に雑魚を拾うが如きの感が拭えなかった。“新冒険論”のピントが何処にも浮かび上がって来ず、“全くくだらん、それがどうした？”と罵詈雑言を吐きながら本を投げ出したのであるが、積ん読してからも何か心に引っ掛かるものがあってゴソゴソと取り出してページを開くという何ともミミッチクてイカサない塩梅となった。後半部にきっと新冒険考の寶が隠されているに違いないと我慢してページを繰ってみたが、そのような験はなかなか顕れなかった。しかし、残りのページが僅か 2 割ぐらいになったところでその隠されていた寶はようやく姿を現した。それは、彼が極北の“裸の大地”を橇で探検することを始めて以来の４年間、段々と身体自身が獲得してきた探検の本質とは何かという行間に隠されていた答であった。

現代の“探検”は衛星通信、GPS、緊急救援システムなどの最新のテクノロジーを装備し緊急事態に陥った場合でもいつでも安全が確保されているような環境下で行われ、また移動手段も犬橇などではなくスノーモービルが主流になっているらしいが、著者は原始人類が何十万年も掛けて行動半径をじわじわと拡げて、より安全で効率の良い道を見つけながらアフリカからアラスカを越えて南米大陸まで大規模な移動を成し遂げたのと同じやり方を再現して（“人類史的に正統なやり方で”）未だ誰も踏み込んだことのない極北の地を旅してみたいということであった。

その実際の方法は、10 匹の犬に犬橇を牽かせて、食料はそれぞれの場所でアザラシなどを捕獲しつつ、犬達の赴くままに（“自然の導くままに”）目的も到達目標地点も定めず新天地を旅するということらしい。タイトルの「裸の大地」というのもそのような探検のグラウンドを指すのであろう。

往古、人類が大移動して行ったグレート・ジャーニーは、例えば探検家・関野吉晴が南米最南端から人類誕生の東アフリカまで逆ルートで徒歩で辿った例などが著名であるが、その時にはリヤカーや自転車を使った。ユーラシア大陸からシベリアを越えて北米大陸に移動して行った太古の人類はそのような運搬道具や携行食料などは持っていなかったが、果たしてどのようにして越えて行ったのか。角幡唯介が到達した“冒険の新境地”とはこのような旅を指すと思われるが、太古の人類が何十万年も掛けて、しかも集団で成し遂げた探検移動をたった独りで、しかも数年間で行うということが一体どのようなものであるのか、それは騙されたと思って、この本をお読みになった後のお楽しみに。

集英社　2023 年 7 月刊　2,530 円　　（酎、2024 年 3 月　記）